

『文学的絶対』の「あわい」を読む

柿並良佑（山形大学）

「アテネウムとは、われわれの出生地 *lieu de naissance* である」

フリードリヒ・シュレーゲル

はじめに

本稿はフランスの哲学者フィリップ・ラクー＝ラバルトとジャン＝リュック・ナンシーが 1978 年に編んだ初期ドイツ・ロマン主義の撰文集『文学的絶対』の一読解を提示するものである。契機となったセミナーが「文学と哲学のあわい」¹と銘打たれていたのを承け、その「あわい」を同書の内に見届けてみようという次第だ。「あわい」は一般に「向かい合うものの間」と解されるが、そこで向かい合うと想定された「文学」と「哲学」とはどのようなものなのか、あるいは、そのような「向かい合い」の構図に両者は収まるものなのかどうか、以下ではつねに問いただされることになる。

1 問題設定／方法序説

今しがた『文学的絶対』を「撰文集」と呼んだが、紐解いてみればすぐ分かったとおり編者たるラクー＝ラバルトとナンシーは大部の注解をロマン主義の理論的テキストに施しているため²、この書物は文献目録に二人の「著書」として挙げられるのが通例となっている。以下でも——とりわけ同書の日本語訳者ならびにセミナーでの役割分担という事情も汲んで——基本的には二人の理論的注解部分を取り上げることにしたい。

1978 年と言えば、日本語で山本定祐編『ロマン派文学論』が富山房より刊行されたのと奇しくも同年だが、ラクー＝ラバルトとナンシーの意図はどこにあったのか。ナンシーによる「日本語版への序」はひとまず措き、同書の目論見を端的に説明する箇所を本文から引こう。

われわれの関心を惹くのは〔……〕われわれがいまなおロマン主義によって開かれた時代に属しているということ、かつこの帰属は〔……〕われわれを掴んで離さないものだが、そうした帰属こそまさしく現代が否定し続けているものだということである。(AL 26/三一)³

¹ 「文学と哲学のあわい——ラクー＝ラバルト／ナンシー『文学的絶対 ドイツ・ロマン主義の文学理論』を読む」、東京都立大学、2024 年 4 月 26 日。

² 原書の表紙には通常著者が記される位置に「Ph. Lacoue-Labarthe / J.-L. Nancy」とあるが、扉頁では二人の名はタイトル・サブタイトルに続いて、「PRÉSENTÉ PAR PHILIPPE LACOUÉ-LABARTHE ET JEAN-LUC NANCY [改行] AVEC LA COLLABORATION D'ANNE-MARIE LANG」とクレジットされている。

³ フィリップ・ラクー＝ラバルト&ジャン＝リュック・ナンシー『文学的絶対——ドイツ・ロマン主義の文学理論』柿並良佑・大久保歩・加藤健司訳、法政大学出版局、2023 年。AL の略号の後に、原書／邦訳の頁数を付す。太字強調は原著者による。同書については以下の拙稿をも参照されたい。「断片の共同体——イエナから〈われわれ〉へ」、日本シェリング協会編『シェリング年報』こぶし書房、第 27 号、2019 年。

「否定する」という動詞の原語 *dénier* は精神分析に言う否定（あるいは否認）を思わせる⁴。事実、引用した箇所直後には「ロマン主義的**無意識**」、「前口上」の末尾には「真正の否認 *une authentique dénegation*」（AL27／三四）という措辞が見られるように、またこの書には陰に陽に精神分析ないしジャック・ラカンへの目配せがみられることを思えば（AL45, 202, 282／六三、三二九、四四八）⁵、それも単なる連想ではあるまい。ここで否定というのはごく簡潔に言えば「自ら表明した欲望を、打ち消すことで拒絶すること」である。現代の——少なくとも 70 年代フランスの——「われわれ *nous*」が表明する欲望の様々な名は「言語の自己構造化原理」等々と枚挙される場所に認めることができる（AL27, 384／三四、六〇二）。

大仰な言い方をすれば、夢・幻想・夜……といったヴェールに覆われた曖昧模糊たる感傷的ロマン主義（とされるもの）とは手を切ったはずの「われわれ」が新たな理論的マニフェストの装いのもとに語っているのは、まさにロマン主義的な欲望だということになる。ロマン主義の成果を端的に示す「前代未聞の何かの**産出＝生産** *production*」（AL21／二三）という表現の中で強調されている語も、ある意味では——すなわち戦後フランスの言説空間における「人間主義 *humanisme*」批判の文脈を先取りするかのように——非・人間的に響く。そうした文脈の中に、しばしばこの書物のエンブレムのフレーズとして引かれる「ロマン主義とは、**文学的絶対**の創始である」（AL21／二四）という一節が位置するのだが、タイトルにも掲げられたこの語法の読み方については後で触れよう。

ともあれシュレーゲルらの初期ロマン主義がそれまで流布していた後期ロマン主義とは異なる点を強調するために「始まり」の契機が上のように取り出されるのは当然である一方、一見すると矛盾するような記述がすでに書きつけられていたことに注意すべきだろう。

〔ロマン派の機関誌である〕『アテネウム』が何かを^{ダブル・ラサ}白紙に戻したり、新たなものを創設したりしたと僭称するようなことは絶対にない。まったく反対で、既存のものの批評的＝危機的な「再開・やり直し *reprise*」への意志〔……〕として『アテネウム』はひととき異彩を放っている。〔……〕『アテネウム』の起源が文献学と批評のうちにあるのは偶然ではない。（AL19／二〇）⁶

ロマン主義との距離（を取ることの困難）については、先行するポール・ド・マンの探究と比較するのが有意義だろう。『ロマン主義と現代批評』中山徹・鈴木英明・木谷巖訳、彩流社、2019 年、16 頁参照。加えて、おそらく『文学的絶対』もその批判の射程内に入るであろう以下の論考を無視するわけにもいかない。カール・ハインツ・ボーラー「親離れする美学」石光泰夫訳、『批評空間』福武書店、第 5 号、1992 年。

⁴ Cf. Jean Laplanche et J. B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 1967, p. 112-113. ラプランシュ／ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1977 年、396 頁参照。見出し語の「否定」の原語は (dé)négation / Verneinung だが、「心理学的意味での**否認** *la dénegation au sens psychologique*」の説明に「否認する *dénier*」とある。

⁵ 付言すれば、ラクー＝ラバルトとナンシーは「書物」よりむしろ「一読解」だと断りながらも、最初の刊行物の主題を他ならぬラカンのテキストに求めている。Cf. *Le titre de la lettre. Une lecture de Lacan*, Galilée, 1973. 刊行時の状況については、ブノワ・ペータース『デリダ伝』原宏之・大森晋輔訳、白水社、2014 年、351 頁参照。

⁶ 下線強調引用者（以下同様）。「始まり」と「再開」の用語法をめぐるのは以下の資料を参照。柿並良佑『文

ロマン主義は「始まり」であると同時に「再開」である、あるいは「始まり」はつねに「再開」なのだと言えはいわゆる「脱構築」の典型的な定式だと思われようか。語そのものは本書に一度しか登場しないが (AL384/六〇二)、たしかに思想運動としての脱構築が広がっていく初期の刻印を本書もまた受けていると言うことはできる。二人とデリダおよびサラ・コフマンが編集人となり「哲学の実際／効力ある哲学 *La philosophie en effet*」と銘打たれた叢書の第一弾としてナンシーの『思弁的注解』(*La remarque spéculative*, Galilée) が刊行されたのが 1973 年⁷、『文学的絶対』までわずか 5 年のことだった。

先の引用末尾にある「文献学と批評 *la philologie et la critique*」に関しては、アウグストとシュレーゲルが文献学者として出発したことがよく知られているし、「批評」についても後段であらためて確認されている (AL374/五八五 - 五八七)。後段と記したが、本書の第四幕、短い「終幕」を別にすれば最終章となるのがまさにその「批評」をめぐるセクションだという構成についても、おそらくは起源が終結と重なり合うのを示唆せんがためではなかったかという推測が働く。文学としての批評、ないし批評としての文学という問題には最後にもう一度触れることにして、まずは「文学」と「哲学」の関係から確認することにしよう。

2 文学「と」哲学

文学と哲学の関係は自明ではない一方、それが古来より議論の的となってきたこともまた事実だ。『文学的絶対』成立前夜のラクー＝ラバルトとナンシーの仕事もまた、ジェラルド・ジュネットとツヴェタン・トドロフが主幹を務める雑誌『詩学』の「混合せる文学と哲学」特集号⁸を見れば一目瞭然、そうした古典的なトposをめぐるものであった。

少なくともプラトンやアリストテレス以来、ポエジーと哲学の統一 *l'union* が公準として要請されている文言 [cf. *L* 115] におのれの運命が結びつけられるのを文学が目当たりにするのは、つい昨日のことでもなければイエーナからでさえない——われわれにそのことを考えるよう教えたのがまさにイエーナであったとはいえ。(AL 23/二七)

文字どおりには「ポエジー」であって「文学」ではないが——「文学」という「概念」を近代にお

学的絶対』拾遺」、『山形大学人文社会科学部研究年報』第 21 号、2024 年、135 頁。reprise は「受け取り直し」とも訳すことのできる語であり、実際、「反復 *répétition*」と訳されることの多かったキルケゴールの著作は今日 *reprise* と訳されることがある (cf. Søren Kierkegaard, *La reprise*, Flammarion, 2008)。

⁷ 『デリダ伝』、前掲書、373-374 頁。

⁸ *Poétique*, n° 21, « Littérature et philosophie mêlées », Seuil, 1975. ラクー＝ラバルトが編集を務めた同号の概要については『文学的絶対』、(44) 頁、訳注 9 を参照。ジュネットはかつて自らがリセで教えたラクー＝ラバルトに捧げられた『リーニュ』誌に寄稿した追悼文で、『文学的絶対』を「ドイツ・ロマン主義の文学理論」の注解付き撰文集を遥かに超えて、「詩学」叢書の正当性をかくも華々しく証明するものの一つであり続けている」と讃えたのだった。Cf. Gérard Genette, « Évocation », *Lignes*, n° 22, mai 2007, p. 45. ジュネットとの関係については『政治という虚構』浅利誠・大谷尚文訳、藤原書店、1992 年、253 頁。

いて発明したのがロマン主義なのだから (AL 22, 21, 265/二六、二三、四二〇) ——、いわば「文学的なるもの」と「哲学的なるもの」の邂逅は古代への憧憬に取り憑かれたロマン主義にとって「モデル」を提供していた。プラトンの名が挙がるだけでも容易に推察されるように「対話」というジャンル、あるいはジャンルというものの一切を包含する「ジャンル」がそれに該当する (AL 66, 268 sq./九七、四二五以下)。

無論、文献学から出発したとはいえ「ロマン主義者」たちは——この呼称にも留保が付されるが (AL 14/15/一二-一三) ——古代のモデルを範例として仰ぎ見ただけではない。「文学」と「哲学」に付された留保、距離、疑念……、単にレトリックとしてではなく文字どおり書かれた括弧は、『文学的絶対』の「閉幕」に至っても容易には外れない。

ひとたびロマン主義が観念論を**完成**させ、その完成の歴史を今日のわれわれに至るまで開いていることが確認できたなら [……] 観念論の内と外でロマン主義が何を争点とし、何を賭け直そうとしているのかを見極める作業に着手することは不可能ではあるまい (お分かりのように、これはとりわけ「文学」と「哲学」の関係には帰着しない)。(AL 420/六五五)

「観念論」とは、一般的にフィヒテ・シェリング・ヘーゲルといった名の連なりと共に知られるドイツ観念論を指すが、例えばフィヒテの哲学がシュレーゲルらに多大な影響を与えたことはほとんどつねに指摘されるがゆえに、『文学的絶対』は敢えてこれに紙幅を割いていないほどだ (AL 46/六七)。ロマン派の「周辺」にいるとされるシェリングに対し (AL 25, 40/三〇、五四)、シュレーゲルは「哲学」をめぐる (一方的な) ライヴアル関係にあり (AL 386/六〇五)、そうした伝記的事実からも一方に文学、他方に哲学と単純に割り振ることができないのは明らかだろう。その関係の複雑さは「観念論の内と外」という語で示され、さらにはロマン主義が観念論を「完成」させるとも言われる。芸術作品、理念、失われたポエジー……端的に言えば〈絶対なるもの〉の完成がロマン主義の課題であったことはラクー＝ラバルトとナンシーの指摘を待たずとも文学史上の常識ではあるだろうが、それは哲学の完成でもあった (AL 20, 40, 51/二二、五五、七四)。その完成 (そして未完成) が『文学的絶対』の鍵語であることは言うまでもない (30 頁、訳注 53)。

こうした企図の帰趨も見定める必要があるが、さしあたりは目下の問題を追わねばならない。

たしかにロマン主義はそれ自体が完全に哲学的だとも、素直に哲学的だとも言えないにしても、ただ哲学的なものを起点としてのみ、哲学的なものへの固有にして唯一の (すなわち前代未聞の) 接続においてのみ、厳密に理解可能 (さらには接近可能) だということである。たんなる「文学運動」でもなければ、何だかよく分からない「新たな感受性」の出現でも——なおさら——なく、芸術理論や美学における古典的問題の (どのような意味にせよ) 再開・やり直し reprise でさえない、そのようなものとしてのロマン主義は間断のない進化や進歩というモデルに従って接近するものではない [……] もしロマン主義がそのものとして接近可能であるとすれば、ある意味では

「中間」においてでしか、この上なく狭い移行を通じてでしかない。(AL 42/五八)

先ほどロマン主義という「始まり」が「再開」であることを確認したばかりにもかかわらず、今度はそうではないという診断に不意を突かれた読者がいるかもしれない。ただ、「間断のない進化や進歩」というモデル *le modèle d'une évolution sans hiatus ou d'un progrès* という直後の表現を踏まえると、通常の文学史における古典主義・ロマン主義・写実主義……等々といった直線的発展を前提として理解される「学派」(cf. AL 17/一六)の一つとしてロマン主義を理解することはできず、したがって先行する諸派の問題を再度取り上げ直す運動として把握することもまた不可能だというのがその主旨だろう。

注意すべきは「中間 (の状態)」を意味する *l'entre-deux* なる表現だが、文学史的発展段階に基づいて理解できない以上、これは例えば古典主義とロマン主義の間を意味しない。直後で補足的に言い換えられた「この上なく狭い移行 *le passage en effet le plus étroit qui soit*」が意味するのは少し後で言及されるカント（とりわけ『判断力批判』）との関係で考えられる「移行」であり (AL 43/六〇)、結局は先の引用のすぐ後で強調されている「危機 *crise*」を乗り越えてかろうじて可能になる狭義のそれに他ならない。

カントとの関係も重大ではあるものの、今は続けて文学と哲学の位置関係を探っておこう。「中間」は両者の間のことではなかったが、いずれにしても文学と哲学は対等な関係をなしてはいないし、そもそも明確に区別された二項であるのかも確かではない。

このテキストが哲学的なもののなかに、哲学的なものに対するズレ *un décalage* を導入していることに変わりはない。何らかのズレ、あるいは歪み *une distorsion*、隔たり *un écartement* といったものが導入されているのであり、このことによってかのテキストはたしかに哲学的なものの真に**近代的な位置づけ** *la position* の端緒となっているのである（周知のとおり、いくつもの点でこの位置は今なおわれわれがいる位置 *la nôtre* なのだ）。(AL 42/五九)

「このテキスト」が指すのは「ドイツ観念論最古の体系プログラム」であり、その解題は同テキストを収録する「開幕」に譲るが、「哲学的」とされるプログラムの中に推定される著者の一人としてヘルダーリンがいることから、単純に哲学の領域に分類できないことが分かる。哲学は自らの領域——**純粋な精神の王国**？——に安住することはできず、その中に忍び込んだとされる「隔たり」に悩まされることになる⁹。同種の語は結論部にも姿を見せる。

⁹ 先の引用文中、*la position véritablement moderne du philosophique* という連辞の「近代的」という語が強調されているとおり、ナンシーは『文学的絶対』に先立ってカント論『失神のディスクール』を上梓しており、そこで扱われるのが哲学を呈示 *Darstellung* するとともに攪乱する「文学」ないし「エクリチュール」の運動であった (cf. *Le discours de la syncope*, Aubier-Flammarion, 1976, p. 26, 44, 66, 80-81, 96, 98 et 116)。ところでこの著作は、本稿の「銘」に引いた「出生地」(AL/17,27(,374)/一六、三三(、五八五))を、もう一つ、カントの言説の内に指し示してもいた (*ibid.*, p. 99)。

本書では冒頭からロマン主義のうちに観念論（そこで減金仕上げされる形而上学）に対する隔たり＝捨てる le lieu ではなく、遊び le jeu を指摘する必要があった。それはときに代補的な複雑さを帯びた捨てる＝隔たりである。(AL 420/六五四)

ロマン主義（文学）と観念論（哲学）の邂逅あるいは対決には、あらかじめ確たる「場所」は用意されておらず、両者の間の「隔たり・距離」を形作るのは「対決・競技・戯れ・賭け」等々の語を持つ jeu だ。勝敗の「最終判決」が下るまで、その分割は確定されない。

3 文学／哲学——いかなる差異か？

しばしばそう思われているように、ロマン主義は観念論が追い求めた〈絶対〉を文学という別の方法を用いて探求したわけではない。後年、ナンシーが寄せた「日本語版への序」(iv - v 頁) はそのような解釈に一定の保証を与えるようにみえるかもしれないが、『文学的絶対』の本編冒頭はこう告げていた。

ロマン主義が「哲学的」観念論にとっての「文学的」契機、側面、表現になる、というわけではない——その逆もまた正しくはなかろう。(AL 57/八三)

すでに確認してきたように、哲学と文学は明確に分離された二つの領域ではないのだから、絶対者、神的なものの感性的呈示をめぐって哲学的な道と文学的な道があるのではないことになる。ではその差異はどのように記述できるのだろうか。

ロマン主義の特殊性を確定するためにシェリングと『アテネウム』の間に認めるべき利用＝作動の差異——また別の言い方をすれば、操作＝作品化の差異——は哲学的なものと文学的なものの差異には決して帰着しない。前者の差異はそれ自体が内的差異であり、この危機的な契機＝時期にあつて「……」「作品」一般の思考がそこから触発されるものなのだから、むしろ後者の差異を可能にするのだ。(ibid.)

理論的マニフェストたる「前口上」、体系概念をめぐる「開幕」と並んで参照されることの多い——というよりは、ほぼそれだけが参照される——「断片」のセクションから抜粋した冒頭の記述だが¹⁰、決して分かりやすいとは言えまい。分解してみると以下の二つの差異が示される。

¹⁰ 例えば以下の日本文学研究では AL 73/一一〇が参照される。Kevin Michael Doak, *Dreams of Difference: The Japan Romantic School and the Crisis of Modernity*, University of California Press, 1994, p. xxxix. ケヴィン・マイケル・ドーク『日本浪漫派とナショナリズム』小林宜子訳、柏書房、1999年、43頁。より後の章 (ibid., p. 116; 前掲邦訳、184-185頁) では、AL 21/二四が引用されるが、林房雄の分析に際して、彼の「文学によって歴史が形成されるというロマン主義的な見解」を表すものとして「文学は、次の時代の性格をつくる」という文言が引かれるのは興味深いところだろう。

① 利用＝作動 *mise en œuvre* の差異、すなわち操作＝作品化 *opération* の差異

② 哲学的なもの *le philosophique* と文学的なもの *le littéraire* の差異

まず①で用いられる *mise en œuvre* と *opération* は『文学的絶対』に頻出し、文学作品がおのれ自身を産出するという強い意味で用いられる鍵語だ¹¹。①で示される差異は「内的差異 *la différence interne*」と呼ばれ、「作品 *œuvre*」が作品になるあり方をめぐって外的要因に依らない差異化がみられることになる。そしてこの①は②に還元されないどころか、②の差異を可能にするという。少なくとも、哲学的な作品化の過程と文学的なそれがあらかじめ区別されるのではないと主張されていることが分かる。

とりわけこの「作品・作品化」をめぐって重要な役割を演じるのが「周辺人物」だったはずのシェリングであり、だからこそ「ハインツ・ヴィダーポルストの信仰告白」なるテキストが本書に収録され、結果的に「哲学的作品」の企図と挫折が論じられることにもなるのだが (AL 40, 249/五五、四〇二)、そのシェリングとの競合関係に重ねられた哲学と文学の対決は最終セクション「批評」まで持ち越されたのだ。

シェリングとシュレーゲルが交差する批評的地点は、「哲学ジャンル」と「文学ジャンル」の分離をめぐって最終判決を下す——あるいは両者の違いを掻き乱す——地点でもあるのだ。¹²

だが仮に分離が果たされるとしても、あるいはそのように見えたとしても両者の関係は錯綜したものであり続けるだろう。哲学的言説に対して、「ロマン主義的書法 *écriture* の極北」 (AL 24/二九) たる「断章 *fragment*」が占める位置をめぐる記述に両者の微細な「あわい」を認めることができようか。

より厳密に言えば、断章は思弁的言説の分身ないし裏側を形作っている。[……] この言説がまさに言説たりうるのは結局、自余のすべてを生み出すことのできる完全なるオルガノンが原初に存在するからである [……] そうした起源的な与件から少しでも離れるやいなや——まさにこの隔たり *l'écart* によって、観念論のただなかにロマン主義の可能性が、さらには文学ジャンルそのものの可能性が開かれる——、たとえば、哲学の外に出るなどせずとも、シェリングの言う〈原初的無差別〉という、よりいっそう漠とした [……] 困難にぶつかることになる。(AL 70-71/一〇五)

¹¹ (21) 頁、訳注 1、(12) 頁、訳注 39、および (13) 頁、訳注 43 を参照。

¹² AL 381/五九八。「最終判決を下す *départager*」という動詞がどれほど意図的に用いられたか定かではない。だが後年のデリダによるナンシー読解は明らかに「分割・共有 *partage*」との響き合いを念頭に置いてこの動詞を選んでいる。Cf. Jacques Derrida, *Le toucher*; Jean-Luc Nancy, *Galilée*, 2000, p. 145 et 247. 『触覚——ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』松葉祥一・榊原達哉・加國尚志訳、青土社、2006 年、242、415 頁。これに対し、「掻き乱す *brouiller*」という動詞は然るべくして選ばれたものだろう。Cf. Nancy, *Le discours de la syncope*, *op. cit.*, p. 82, 100-101, 103, 105, 123 et 147.

この文脈で分析されている「種子 *une semence*」という「有機体的」モチーフには、先ほどみた「内的差異」が、そして「形成力」ないし「潜勢力」が「現実態」となって満ちている¹³。原初の完全性が失われるというイメージは後の『無為の共同体』にみられるノスタルジー批判を思わせもするところだが¹⁴、銘記すべきは文学が哲学の「外」に現れるのではなく、隔たりを通じてその「ただなかに」開かれるという点だ。引用冒頭の「分身 *le double*」や「裏側 *le revers*」という措辞も同様の位置関係を示すべくして選ばれたものだろう。内と外が絡み合う配置から「外密性 *extimité*」なる語が想起されるかもしれない。自らの外部にあるものが最も内的・親密な *intime* ものを構成するという論理を説明するため、後年になってからのことだがラクー＝ラバルトはラカンが鑄造したこの語を用いたのだった¹⁵。

最も内的なものが外にあり、外にあるはずのものが中心を構成するという捻れた位置は、また別の語を通じて表現される。「外 *ex-*」と「作品 *ergon*」という語源に訴えつつ、ラクー＝ラバルトとナンシーは「銘 *exergue*」に範を取って断章の機能を理解する。

作品にとって本質的な作品外のもの *le hors-d'œuvre*、作品にとって作品そのものよりも本質的な作品外のものである。断章は銘のように、ギリシア語の動詞、*exergazômai* の二つの意味に従って機能する。すなわち、断章は作品の外にみずからを刻印し、作品を成就する。(AL 69/一〇二)

体系的に理路整然と構築された哲学的叙述の外、そこにこそ真の作品は現れると言わんばかりだ。引用に続く段落ではそのことが明言される。

無限が呈示されるときには必ず、おのれの銘を経由するということでもある——そしてもし無限なものの *Darstellung* [呈示・描出] がカント以後、カントの意に反して観念論の関心を占めてい

¹³ 「オルガノン」については(19)頁、訳注29、およびAL 279/四四二を参照。『文学的絶対』では「差延」概念はさほど明示的に用いられていないものの、例えば「オルガノンというよりは有機体化する何か *ce qui organise*」(AL 69/一〇三)といった言い回しに原初における差異化の運動を認めることができるだろう(差延についてはわずかだが後述する)。有機体の比喩については若干ながら以下で触れた。「観念に到来せ(ざ)る病について」、『物語研究』物語研究会、第21号、2021年、155、165頁。また、ナンシーによる「潜勢力」と「現実態」の脱構築については以下の拙論を参照。「信は行為に放たれて」、『Suppléments』脱構築研究会、第1号、2022年。

¹⁴ Cf. Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1986 ; 3^e éd., 1999, p. 31, 46-47, 49, 50, 53, 94 et 116. 『無為の共同体』西谷修・安原伸一郎訳、以文社、2001年、20、32-33、34、35、38、69、86頁(32頁6行目で *nostalgie* に対応する訳語が欠落)。「失われた起源」についてはAL 382/五九九を参照。

¹⁵ Philippe Lacoue-Labarthe, *Poétique de l'histoire*, Galilée, 2002, p. 133. 『歴史の詩学』藤本一勇訳、藤原書店、2007年、182頁。一貫して「作品化 *mise en œuvre*」を問いつけたラクー＝ラバルトのことゆえ当然ではあるだろうが、そこにも「言い回し=手管 *tour*」や「内的差異」といった本書の鍵語が散りばめられている。付言すれば、ナンシーが至るところで諳んじてみせる「内奥よりも奥深いところに *interior intime meo*」というアウグスティヌス(『告白』第3巻第6章)由来のフレーズを、ラクー＝ラバルトはまさしく「外密性」ないし「外密なもの *l'extime*」と等置するのだ。Cf. Philippe Lacoue-Labarthe, « L'horreur occidentale » [1996], *Lignes*, n° 22, mai 2007, p. 231 (repris dans *La réponse d'Ulysse*, Lignes/Imec, 2012, p. 65) ; id. « Le dépaysement » [2005], *Écrits sur l'art*, Presses du réel, 2009, p. 252. ラカンの用例については以下。Jacques Lacan, *L'éthique de la psychanalyse*, Seuil, 1986, p. 167 ; id. *D'un Autre à l'autre*, Seuil, 2006, p. 224 et 249. ジャック・ラカン『精神分析の倫理』小出浩之ほか訳、岩波書店、2002年、上巻、211頁。

るとすれば、ロマン主義は断章＝断片となった文学 la littérature en fragment を通じて、哲学上の観念論の銘を形づくっているということになる。(ibid.)

無限、あるいは超感性的なものの経験を不可能と断じたカント「以後」をロマン主義が観念論と共有していることは思想史上の常識でもあり、本書でも確認されていたことだった。その観念論との対決を孕んだ距離がこうして「外」ならざる「外」として描き出されたのだが、それは「断章」だけに関して言われているのではない。厳密には「断章」ではないとされる¹⁶『着想集』*Ideen*——「イデー」——という表記は日本語空間では別の書名として定着している現状に鑑みて、われわれの訳書ではこの題を採ることにした——を論じる「理念」のセクションでも再度、内と外、哲学と文学の境界をめぐる考察が展開されることになる。L'idée というセクションのタイトルをどう訳すかという点もまた、とりわけ非ヨーロッパ語圏の翻訳者を悩ませる問題だが、まずはドイツ語の言説空間内部においてフリードリヒ・シュレーゲルが仕掛けた戦いを論じるくだりにこうある。

観念論の「一步」はたしかに踏み出されているが〔……〕しかし観念論自体に対する漠とした抵抗のようなものがないわけではない、より厳密には、観念論からカントへの〔……〕一種の折り返し、有限なもの自体のなかでの有限性の侵犯がみられないわけではないのだ。繰り返すが、ここにはヘーゲル弁証法に固有の運動と重なっているようにみえる——がしかし、深淵によってそこからは隔てられている——何かがある。(AL 187／三〇四)

直訳すれば、ロマン主義と弁証法を「深淵が分離する un abîme sépare」。最終章まで持ち越されるのはシェリングとの対決だけでなく、『美学講義』でロマン主義を厳しく論難したヘーゲルとの争いでもあった。単なる外ではなく内なる外、それが今度は「一種の折り返し une manière de repli」の語をもって指し示されているが、「うねり」や「襞」をも意味するこの語は初期ロマン主義の生み出した最もまとまった形での試論『ポエジーについての会話』を読み解く際にも「形式主義的な」襞の折り返し *ce repli « formaliste »* (AL 267／四二四) として、すなわち「鏡と思弁、双方の特徴がないまぜになった入れ子構造 mise en abîme indissociablement spéculaire et spéculative」として再び現れる。「神話についての講話」という哲学的議論を含み、一篇の小説でもあるような小説理論たる同『会話』をめぐっては『文学的絶対』第3セクションがその勘所を的確に示しているとおりだ。

以上、文学と哲学の見定めがたき「あわい」の諸相に接近するためのいくつかの手がかりを探ってみた。本節では最後にもう一点、シュレーゲル＝ロマン主義の身振りを表す語を浮かび上がらせておきたい。

ロマン主義的批評はむしろもう一捻り un tour de plus 加えて観念論を込み入ったものになっている。

¹⁶ AL 59-60／八七を参照。そこでは別の「隔たり」がロマン主義の「内部」に奔っている。

たしかに一捻りしたくらいでは形而上学一般も、特殊としての観念論も揺るぎはしない。[……]
 しかしながらこうした捻りという手練手管 ce tour によって観念論は変調をきたしたり、本来の位置からずれたりするのだ。(AL 385/六〇四 ; 267/四二三をも参照)

tour という語の多義を示そうとしていささか回りくどい訳文になった点についての弁明は持ち合わせていない。少なくとも留意すべきは、「ズレ un décalage」(AL 42/五九) という本節ですでに参照した表現が一貫して用いられている点だ。引用の後半部は直訳すると「こうした捻り＝手管が観念論をずらす ce tour [...] le décale」。フランス語で tours de cartes と言えばカード・マジックのことであり、やはり先に言及した écart の二義が想起される。

ただしロマン主義が手にする武器である「手管」は、諸刃の剣でもあるのだろう。これもヘーゲルとの距離が問題になる場所で「代補的 supplémentaire」という形容を伴っているのは偶然ではあるまい (AL 205/三三四 ; cf. 382/六〇〇)。ロマン主義が演じてみせる手品はロマン主義自身をも脅かす……、「閉幕」があらためて強調する「曖昧さ l'équivoque」はそうした場面にも付き纏っている。

4 書物の資格／称号

注解部分だけでも相応の紙幅をもつ一冊の書を、一つの論点から要約することはもとより不可能ではある。しかし「前口上」から「閉幕」まで、術語ではないにしても一貫した措辞により分析が提示されていることは以上の作業から明らかだろう。とりわけ「隔たり l'écart」の重要性を銘記しえた今、われわれは L'absolu littéraire という書名の意味をあらためて問うことができるはずなのだ。

こう言ってよければ文学のジャンルの性質 la généricité、および生成的性質はそれ自体が前代未聞の〈作品〉、無限に前代未聞の〈作品〉という姿をとって把握され、産出される。したがって、文学の絶対 l'absolu [...] de la littérature だ。だが文学の絶 - 対 = 分 - 離 son ab-solu でもある。つまり [……] 文学が他から隔絶されること sa mise à l'écart なのだ。[……] もし自己産出が思弁的絶対 l'absolu spéculatif の究極的審級と閉域を形成するのが確かであるなら [……] ロマン主義の思考のうちには文学の絶対だけでなく、絶対としての文学 la littérature en tant que l'absolu を認めなければならない。ロマン主義とは、**文学的絶対** l'absolu littéraire の創始なのである。(AL 21/二四)

文学と他の事象・領域との「隔たり」の様相についてはもはや説明を要しまい。それが「絶対 absolu」の語源に遡って「分離」と呼び替えられる点についてもその意を汲むことができる。問題は「文学の絶対 l'absolu [...] de la littérature」という表現だ。

例えば「青空 le ciel bleu」を例に取ろう。形容詞 bleu を実詞化して le bleu du ciel と言えば「空の青さ」を指すことができるが、眼前の空を見ながらこれを口にするときには当然ながら抽象的な「青さ一般」ではなく、頭上に広がる空の具体的な青を見ているのであり、さしあたり力点が「空」から「青

さ」に移っていることを理解しておけばよい¹⁷。

そうだとすれば、「絶対的な文学 la littérature absolue」なるものが想定できたとして、その「絶対的な性質」を実詞的に l'absolu と表現することは可能となろう。この時点ではまだ、l'absolu de la littérature を「文学の絶対性」程度に訳しても問題はなさそうだが、「自己産出 l'auto-production」するものが論じられる段になれば、哲学ではしばしば「絶対者」と訳されてきたように実詞化の度合いがさらに強まったとみるのが適切だろう。日本語での響きとして安定を欠くと感じる向きもあるだろうが、それもまたロマン主義の「曖昧」の一端を表すのだという理屈を口実に、人格神のごとき存在を喚起しもする「者」の字を取り去り、書名に「文学的絶対」の五文字を充てた次第だ¹⁸。

ただし、absolu が実詞であることを強調しすぎても争点を見失いかねない。『文学的絶対』という書物は当初『文学的操作』*L'Opération littéraire* として刊行が予告されていたのだった。

ロマン主義は「何がしかの文学」« de la littérature » でもなければ（彼らはその概念自体を発明している）、たんに（新旧の）「文学を対象とする理論」でもない。そうではなく文学としての理論そのもの、あるいは同じことだが、自分自身の理論を産出しながらみずからを産出する文学なのである。文学的絶対、それはまた、おそらく何よりもまず、このように絶対的な文学的操作＝作品化 cette absolue opération littéraire である。（AL 22／二六）

タイトルが変更された経緯についてはこの一節に付した訳注で説明したとおりだが、そこに付記したラクー＝ラバルト『近代人の模倣』の表現を借りるなら、作品の「自己懐胎 auto-conception」というプロセスをこそ「文学的操作」なる定式はいわんとしており、「絶対者」ではなく「絶対」の語を採るのにはそうした理由がないわけでもない。

プロセスと書いたが、それが終わりにき過程であることはあまりにも有名な『アテネウム断章』116 が宣言している。そして「狙い・照準・目標 la visée」¹⁹である「絶対」が同時に絶え間ない「解

¹⁷ 基本書による説明として以下。新倉俊一ほか『フランス語ハンドブック』白水社、改訂版、1996年、56頁；朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002年、322頁。ジョルジュ・バタイユの *Le bleu du ciel* の邦訳2種の訳題が異なるのには、こうした理由がある。Cf. Georges Bataille, *Œuvres complètes*, Gallimard, tome 3, 1971, p. 455. 『青空』天沢退二郎訳、晶文社、1968年、143頁；『死者／空の青み』伊東守男訳、『ジョルジュ・バタイユ著作集』第4巻、二見書房、1971年、226頁。

¹⁸ これまでラクー＝ラバルト&ナンシー両者の著作の邦訳でもこの書名の訳題はまちまちであったが、（高橋允昭『デリダの思想圏』（1989年）を別にすれば）『文学的絶対』への日本語でのおそらくは最もまとまった言及のある清水徹『書物について』（岩波書店、2001年）では、この訳題が与えられている。ただし恥を忍んで告白すると、同書の存在に気がつき参照しえたのはわれわれの日本語訳書見本が手元に届いた後のことだった。

¹⁹ la visée および動詞 viser について、網羅的ではないが用いられている箇所を挙げる。AL 15, 45, 47, 48, 50, 60, 65, 66, 69, 74, 78, 196, 203, 249, 278, 375, 378, 389, 420, 425／一四、六四、六六、六八、七三、八八、九六、九八、一〇三、一一〇、一一七、三二〇、三三〇、四〇二、四四一、五八七、五九三、六一一、六五五、六六三。ロマン主義のテキストの仏訳で対応させられているドイツ語原語の一覧表の作成にもそれなりの意義があるかもしれないが、ここでは断念する。

消・分解 l'absolution」²⁰であることも『文学的絶対』の抉り出したロマン主義の宿命ないし宿痾だった。かくして文学も、そして哲学もおのれの同一性を手にすることができないという危機の継続へと、「閉幕」は送り返す。

自己顕現においては、単に文学から哲学へ、哲学から文学への一致 l'identité が起こらないというだけではない。それと同じように、文学の文学自身に対する、哲学の哲学自身に対する一致・同一性 l'identité が生じないのだ。ここにみられる〈同〉Le Même は自らの同じものの性 sa mêmeité に辿り着くことはない。これこそロマン主義において、すでにして文学でも哲学でもない何ものかが**知った**ことである。(AL 421/六五七)

〈同〉と〈他〉という現代思想の母型的構図に対して、例えばナンシーがどのように思考をめぐらせていったのか、その一端は別の機会に論じたので詳細には立ち入らない²¹。ここでは「何ものか quelque chose」という、それ自体としては特筆すべきことのない表現に注意を喚起しておきたい。物や事象を表す chose という名詞は、『文学的絶対』ではロマン主義の追い求めた名付けえぬもの、「ソレ」としか呼びようのない何かを指して随所で用いられる (AL 183/二九八に付した訳注 2 参照)。「ソレ」はあるいはヴィンフリート・メニングハウスが「事象それ自身 die Sache selbst」²²と断言したものかもしれないが、しかし chose がラテン語の res という語源を介して「無 rien」とみなされていたことを忘れるわけにはいかない (AL 266/四二二に付した訳注 5 参照)。この点については最後にもう一度触れよう。

5 自己(脱)構築としての批判＝批評

本稿第 1 節後半で、『文学的絶対』に「脱構築」の語は一度しか登場しないと述べた。絶対化と解消の逆説や代補の論理についてみたとおりその運動は至るところで作動しているが、単語としては確かに hapax となっている (AL 384/六〇二)。それが「批評 La critique」の名を冠する最終セクションになってようやく登場するという点が興味深いところだ²³。「作者が同時に批評家や理論家や詩論家である

²⁰ AL 43, 79, 421/六〇、一一八、六五六。これに対して absolutisation が用いられている箇所は以下。AL 78, 191, 194, 277, 278, 386/一一三、三一〇、三一七、四三九、四四一、六〇六。

²¹ 拙論「Mémaltération」、西山雄二・柿並良佑編『ジャン＝リュック・ナンシーの哲学』読書人、2023 年。

²² Winfried Menninghaus, *Unendliche Verdopplung. Die frühromantische Grundlegung der Kunsttheorie im Begriff absoluter Selbstreflexion*, Suhrkamp, 1987, S. 181, 195. ヴィンフリート・メニングハウス『無限の二重化』伊藤秀一訳、法政大学出版局、1992 年、227、244 頁。以下、本書からの引用に際しては UV の略号の後に原書／邦訳の頁数を記す。

²³ 他に適当な箇所がないためここに記すが、『文学的絶対』のその後を考える上で、「性格＝特性の形成 la formation du caractère」という注解部のタイトルが、「ユダヤの民は夢を見ない」(1980-81 年)ではフロイトに倣って用いられることに注意を喚起しておきたい。Cf. Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy, *La panique politique suivi de Le peuple juif ne rêve pas*, Christian Bourgois, 2013, p. 98. 「ユダヤの民は夢を見ない」藤井麻利訳、『イマージュ』青土社、1992 年 7 月号、138 頁。

ラクー＝ラバルトとナンシーが参照している『モーセという男と一神教的宗教』の仏訳 (*Moïse et le monothéisme*, trad. Anne Berman, Gallimard, 1948) で、formation du/d'un caractère という連辞が認められる箇所に対応する表現を日本語版『フロイト全集』(岩波書店、第 22 巻、2007 年)に従い記しておく。「人格形成

ことなしにはもはや作者たりえない」という一節は、「我らがモデルニテ *notre modernité*」²⁴の自己診断を行う本書ならではの指摘だろうが、まさにそこで問われているのは先に参照した「閉幕」からの引用にみられる「同一性」なのだ。圧縮された議論をさらに要約して提示することは困難だが、一方で批評は完成された作品の「代用品」でありながら、他方で作品の核心に棲まい、その「構築」を行う力でもある (AL 383/六〇〇 - 六〇一)。まさしく「代補」的な観点からの分析であり、以下のような定式がそれを簡潔に述べている。「ポエジーのポエジーによる**滅金仕上げ** *le parachèvement poétique de la poésie*、それが批評的同一性という身分への接近である」(AL 384/六〇三)、あるいは「〈絶対〉をめぐる学は滅金を施して仕上げねばならない」(AL 386/六〇六)。

「完成 *achèvement*」はそれを飾ると同時に裏切る「滅金仕上げ *parachèvement*」に他ならない……。あまりに「脱構築主義的」な読解だろうか？ だがラクー＝ラバルトとナンシーはフリードリヒ・シュレーゲルのテクストと共に述べていた——偉大なる作品の失われた近代とは「**ほとんど**批評から始まる時代」(AL 382/五九九)なのだと²⁵。Poesie と呼ばれるにせよ Literatur の呼称を付与されるにせよ、追究された〈文学〉の辿り着くところは、かくも曖昧——*équivoque* の語義を確認するなら、かくもいかがわしき——批評なのだろうか。フランス語の *littéraire* という形容詞の二義に関して言われたことを踏まえればそうなのかもしれない (AL 387/六〇八)。

「文学的絶対」という表現が本文に登場するのは7回、そのうち一度はシュレーゲルの言葉で「真の文学 *eine wahre Literatur / la « vraie littérature »*」(AL 277/四三九)²⁶と呼び替えられているのを、注意深い読者は見逃さなかったことだろう。だがその「真の文学」、真の作品は書かれなかった……。ゆえにこそこの問題は「**抒情詩の欠如** *le défaut de lyrisme*」(AL 287/四五六)の指摘とともに最後まで持ち越されたのだった。無限と有限をめぐる問題に「特性描写」を介して一定の決着を見ようとするそのセクションが「批評＝批判」と題されるのには、かくして相応の理由があったというわけだ。

6 残響する〈絶対〉

70年代末に刊行された書物の後日譚、とりわけフランス語圏で生じた「論争」については注3に挙げた拙稿で多少なりとも報告しており、ここで補足すべき材料は持ち合わせていない。敢えて付記す

[die] Charakterbildung」、「性格を特徴づける [die] Prägung des Charakters」(96 頁)、「民族特質の造型 [die] Bildung eines Volkscharakters」(126 頁)、「独特の性格はいかにして成立 [...] wie entstand der besondere Charakter」(130 頁)、「性格発展 Charakterentwicklung」(157 頁)。煩瑣を厭わずドイツ語原語を添えたのは、Bildung はもとより、Prägung なる語がラクー＝ラバルトの言う「存在類型論」にとって果たす役割を踏まえてのことである。

²⁴ Cf. AL 22, 26, 77, 384, 389, 390/二六、三一、一一五、六〇二、六一〇、六一二。その他に「モデルニテ」の語が現れるのは以下の箇所。AL 20, 58, 72, 80, 189/二二、八四、一〇七、一二〇、三〇七。

²⁵ カントのカテゴリーの中に「ほとんど *presque*」がないことをシュレーゲルが嘆いたと付記されているが、これと並んで「批評断章」80にみられる「ほぼ *à peu près*」をナンシーはすでに強調していた (cf. *Le discours de la syncope*, op. cit., p. 11, 93, 123, 125 et 145 ; AL 420/六五五)。また後年、デリダは別の文脈でその意義を浮き彫りにしたのだった。Derrida, *Le toucher*, op. cit., p. 164, 167, 170, (176) et 252. 前掲邦訳、271、276、281、(290)、301、424 頁。

²⁶ 他の用例は以下。AL 8, 21, 22, 26, 27, 421/一、二四、二六、三二、三四、六五六。なお、Ath. 101 で「真の文学」と訳されているのは *rechte Poesie / poésie véritable*。

るとすれば、先に名を挙げたメニングハウスによる『文学的絶対』の評価だろう。『無限の二重化』は、ラクー＝ラバルトとナンシーの仕事に大きな影響を及ぼしたヴァルター・ベンヤミンのロマン主義読解が「はじめはこじつけや短絡 *Gewaltsamkeiten und Verkürzungen* が目立つ」にもかかわらず「成功裡に glücklich」終わるのだと、丹念なテキストの点検を通じて主張する (UV 65/七七)。その成否や同書がドイツ語圏で受けた評価等について判断することは、無論、本稿の能くするところではない。一点、確認しておきたいのはメニングハウスによる『文学的絶対』評だ。日本語版では「訳者あとがき」が説明するとおり割愛されているが、ベンヤミン受容を概観する小論に付した注の一つで、彼はユーリー・シュトリーターが 1953 年の自著の再刊 (1984 年) に付した序文で示唆した初期ドイツ・ロマン主義と構造主義的記号論、さらにはポスト構造主義および脱構築主義の結びつきに触れ、こう続ける。

こうした示唆の後半部に関する (先取りされた) 試みは、フィリップ・ラクー＝ラバルトとジャン＝リュック・ナンシーが、自分たちの編んだ一巻本の初期ロマン主義のフランス語版選集に添えた優れた注解的導入部 *die vorzüglich kommentierenden Einführungen* によってすでになされている。そこで示されているのは、初期ロマン主義者自身によって公刊されたテキストのうち最もよく知られたもの、ならびに彼らの主要概念 (ロマン的、断章、愛、宗教、ジャンル *Gattung*、批評、文学) を注解するというだけでも、どれほどポスト構造主義的モチーフ *poststrukturalistische Motive* へ通じることになるのかということだ。 (UV 286)

(ポスト) 構造主義の先取りとしてのロマン主義という論点は『無限の二重化』本論で幾度も指摘されているため、この記述に驚くべき点はない (UV 25-26, 178, 185, 205/二五 - 二七、二二二、二三一、二五七)。より個別にはデリダの「存在記号論 *onto-semiologie / semantologie*」の予期が焦点化されているが (26/二七; cf. 115, 122, 131, 141/一四一、一五〇、一六〇、一七五)、このような指摘は今日もはや新奇なものではあるまい。それよりもここで確認しておきたいのは、メニングハウスが「先取り *Vorwegnahme, Antizipation*」という見立てによってロマン主義とデリダを接近させるときに何が生じているのか、という点だ。「(非絶対的) 絶対 *das (nicht-absoluten) Absolute*」 (UV 87, 95/一〇五、一一六) と陰影を含ませているが、「戯れ *das Spiel*」が「絶対である *ist das Absolute*」と言い (UV 57/六六; cf. 130-131/一六〇 - 一六一)、「差延としての絶対 *das Absolute als différance*」 (UV 91/一一〇) を語るとき、そこには実体なき無限の自己反省というロマン主義的モチーフを「ポスト構造主義」において再実体化させてしまう危険が待ち受けているのではないか。言い換えれば、こうした身振りは、しばしば「脱構築」に対して投げつけられてきた「否定神学」化の道を、さらにはそれを通じて「肯定神学」へと向かう道を歩んでいるのではないか。第 4 節末尾に引いた「事象それ自身 *die Sache selbst*」なる語が気にかかったのも同じ懸念からのことだ。差異を反転させ、無限の生成を謳う文学の同一性を回復する目論見が隠れているのだとしたら、それはラクー＝ラバルトとナンシーの企図のみならず、ロマン主義者たちのそれをも裏切ることになりはしないか。

目下この点を論じる余裕は残されていないが、最後にメニングハウスの述べなかった点に触れて『文

『学術的絶対』の一読解の結びとしたい。

終わりに

奇妙と言うべきか、デリダの「主要概念」のうちでもよく知られる「散種」こそ、第3節で触れたロマン主義的モチーフの「種子」との近さが目に付くはずだが、メニングハウスはこれにほとんど言及していない（UV 123／一五一に論文名は挙がる）。その理由を明らかにする準備は手元にはないが、この語を目にすると「断片化は散種 *une dissémination* ではなく、播種 *l'ensemencement* と将来の収穫とに適う散逸 *la dispersion* なのだ」という一節を想起しないわけにはいかない（AL 70／一〇四）²⁷。片手にロマン主義、もう一手にデリダらのテキストを抱えたラクー＝ラバルト＆ナンシーにしてみれば、ロマン主義的エクリチュールの代名詞であった「断章＝断片」は、現代哲学の言う「散種」ではない——そう言わんばかりだ。無邪気で素朴な悪魔祓いなどではなく、イエーナの青年たちによる革命的文学運動、いや、文学による革命（の遺産）の真価をおよそ200年後に見定めようとした「哲学者」たちの下す診断として、こうした文言は冷酷に響くかもしれない。曰く、「われらがモデルニテの有するエクリチュールの思考、とくにブランショとデリダの思考に比肩しうような思考がロマン主義のなかで着手されたことは決してない」（AL 77／一一五）。「閉幕」が近づいてもその調子は揺るぐことがない。

ロマン主義者はたった一度でも〔……〕そうした思考のいずれかをただ想像してみることすらなかった、と必要があるだろうか？ むしろこうした思考はロマン主義のうちで蝕^{エクリプス}っていったのだ。（AL 422／六五九）

事ここに至って、『学術的絶対』はロマン主義の「擁護と顕揚」の書ではないなどと敢えて断る必要はない。とはいえ、いったい何のためにフランス語で400頁以上の労苦を費やして、そのような蝕^{エクリプス}に伴走する必要があったのか？ そう訝しむ向きもあるだろう。ラクー＝ラバルトとナンシーの解答は快刀乱麻を断つ類のものではなかったように後を引く。「断章」のセクションに付された注解部分の最後で、ノヴァーリスの言う種子のうちに散種の可能性をいささか曖昧にではあれ認めるとき（AL 80／一二〇）、「無為 *désœuvrement*」概念を引き継ぐ二人が直接には参照していないにせよ、「断章＝断片」と「断片的なもの *le fragmentaire*」とを区別したブランショを念頭に置いていたであろうことは想像にかたくない²⁸。それゆえか、結語には可能性を仄めかす一文が紛れ込んでいる。

だがまさにそのようにして、ロマン主義はおのれに固有の曖昧さ *sa propre équivoque* を維持しつ

²⁷ AL 425／六六三をも参照。参考までに *dispersion* および動詞 *disperser* のその他の用例は以下。AL 69, 80, 195, 199, 266, 272, 274, 281, 373／一〇二、一二〇、三一八、三二四、四二二、四三〇、四三四、四四六、五八五。

²⁸ Cf. Maurice Blanchot, *Le pas au-delà*, Gallimard, 1973, p. 61. ブランショと『学術的絶対』の関係については以下の旧稿で論じたことがある。「断片」の理論——ラクー＝ラバルト／ナンシー『学術的絶対』読解、『哲学の探求』第37号、哲学若手研究者フォーラム編、2010年。

つ、最終的にはそれらの思考を可能にする定めにあったのかもしれない。(AL 422/六五九)

二人の編んだ撰文集はおそらくはその名に反して、〈文学的絶対〉という理念そのものよりも、それが覆い隠しも暴露もしている〈曖昧^{いかがわしさ}〉にこそ誠実たらんとした「われらがモデルニテ」の証言であり続けている……。原書刊行後 46 年を経た現在、訳者の一人としてそう書き記しておきたい誘惑に駆られたことを最後に告白せざるをえない。